

Śikṣāsamuccaya における菩薩の学処整理法とその ヴィクラマシーラの学僧への影響について

佐々木 一憲

古来、インド・チベットでは「經典集」と呼ばれる、諸經典の要点を抜粋・整理した著作が数多く作り続けられてきた。本稿ではそのような「經典集」のうちでも最大のものである、インド中後期の論師シャーンティデーヴァ (Śāntideva, C.690-750)によってまとめられた *Śikṣāsamuccaya* (SS) を取り上げ、そこに見られる菩薩の学処の整理法とそれが後世に与えた影響とを検証する。

I. SS の学処整理法

1. SS の構成と偈頌

SS は大乘經典からの引用を順序だてて並べた「經典集」であり、19 章からなる。その造論の目的は、題名の意味するとおり、菩薩の實踐に関わる学処の要点を提示することにある¹。一般に菩薩の實踐という言葉から直ちに想起されるのは「六波羅蜜」であり、事実、本書の各章の表題にもその名は散見される。しかしながら、本書が必ずしも六波羅蜜の秩序に沿ったものではなく、むしろそれとは別の意図のもとに構成されていることは、先学諸氏の研究により既に明らかにされている²。すなわち、論主シャーンティデーヴァは自作の 27 偈からなる偈頌 (kārikā) によって論書の骨格を構成し、そこに膨大な經典引用による肉付けを施すことによって本書をまとめているのである。全体の 9 割以上は經典の引用部分によって占められているが、シャーンティデーヴァは先述の偈頌とわずかな自釈によって巧みにそれぞれの經文に所を与え、菩薩の学処を体系的に提示している。

論主は冒頭、大乘に信を起すことから説き起こし、続いて願・行二種の菩提心を提示する。そして行の功德の大きいことを種々に説きながら実践行を勧め、その実践の指針、あるいは軌範をどこに求めるのか、という文脈を設けた上で³、以下のような『宝雲經』の引用を導入する。

菩薩の学処は諸々の經典に説かれている。たとえば、『聖宝雲 [經]』のなかに、「善男子よ、いかにして菩薩は菩薩の学処を具えることになるのか。このとき菩薩はこのように考察する。別解脱律儀のみでは自分は無上等正覚を証得できない。ではどうなのか。あれこれの經典において如来によって示された菩薩の振る舞い・菩薩の学処を、それぞれについて私は学ばねばならない」云々と、詳細に説かれている。⁴

論主はこの引用に続けて、「詳細に説かれているが故に、我々のような智慧の劣ったものには、菩薩の制戒は理解し難い。では、如何なるものが相応しいのか？ それ故、毀犯 (āpatti) が生じないよう、諸々の要処を知るべきである。」⁵とし、続けて以下のように説く。

諸々の經典の中で大乘を喜ぶ者達のために説かれたそれらの要処とは何か。すなわち、「身体」と「享受」と三世にはたらく「善性」とを一切衆生の為に「捨施」すること、それらを「守護」し「浄化」し「増大」することである。

これが菩薩の制戒を集約したものである。⁶

ここに掲げたのは論主の提示する偈頌のうちの第3偈、第4偈に相当する部分であるが、浅野[1991]は、この部分が27の偈頌全体に対する総標となっていることを指摘すると共に、この第4偈に現れる七つの要処 (marmasthāna⁷) の組み合わせから導出される修道項目を順に並べることによって本書全体が構成されていることを明らかにした。ここで、浅野[1991]および Hedinger[1984]とがそれぞれ掲げる表を参考に、改めて〈七要処〉・〈偈頌〉・〈六波羅蜜〉・〈章立て〉の対応関係を図表にまとめてみるならば次ページのようなになる。これによっても、この七要処の組み合わせ、すなわち【身体 ātmabhāva】、【享受 bhoga】、【善性 subha】の三者を【捨施 utsarga】、【守護 rakṣā】、【浄化 suddhi】、【増大 vardhana】するという、三×四の合計十二の修道項目⁸の提示という観点から、本書が極めて整然と組み上げられている様子を確認することができるだろう。

2. 七要処・十二項目の学処整理法

さて、シャーンティデーヴァは行学の面で後世に強い影響力を持ったことが知られている。たとえば、プラジュニャーカラマティを筆頭に、ヴィクラマシーラ系の名だたる学僧たちは、一般に彼の主著とされる *Bodhisattvacaryāvatāra* (BCA) に対してこぞって註釈を著しているし、その後のチベットでも、彼の二つの著作は共に菩薩の行を学ぶための論書の代表としてカダム派の六宗典のなかにも収められている。

二書のうち BCA の方は、「般若波羅蜜の説示」と題される第九章を中心に、中後期の中観思想を代表する論書として現代の研究者たちの関心も高い。それに比較して SS は等閑視されがちで、引用の源泉としての価値を指摘するものを除けば、研究者たちによってその思想的な重要性が指摘されることはこれまでほとんどなかったと言ってよい。しかしながら、残されている関係文献に具にあたってみるならば、インド・チベットの往時の学僧達の中には、SS に対してもまた単なる經典集という以上の思想的な価値を認める者のあったことが確認されるのである。例えばプトン (Bu ston, 1290-1364) は *Chos 'byung* の中で本書を經典の言葉を再構成する論書の代表として挙げている¹⁰、ツォンカパ (Tsong kha pa, 1357-1419) もまた「非常に深淵で広大な諸々のお言葉を並べる配置そのもの (go rim nyid) によって全ての (修行) 道の枢要 (gnad) に決定を与えるもの」と評している¹¹が、それぞれ当時のチベットにおいて学僧達の指導的な立場にあった彼らにそのような見解があったということは、特に注目されてよい事実であると思われる。

さて、このプトンやツォンカパの言葉に従うならば、SS は大乘の教説の要点を体系だてて整理するという点において重要な論書と考えられていたということになるだろう。そうであるとすれば、彼らは本書に教説の整理法とも呼ぶべき何らかの体系を見ていたことになるであろうが、その整理法こそ、ここに見てきた七要処・十二項目による学処の整理法に他ならないと考えられるのである。

	〈七要所〉	〈偈頌〉	〈六波羅蜜〉	〈章立て〉
序論		(1,2 偈)		第 1 章
総論		(3,4 偈)		
【捨施】	【身体】		dāna	
	【享受】			
	【善性】			
【守護】	総論	(5,6 偈)	śīla	第 2 章
	【身体】	(7ab 偈)		第 3,4 章
		(7cd 偈)		第 5 章
		(8,9,10,11,12,13 偈)		第 6 章
	【享受】	(14 偈)		第 7 章
	【善性】	(15,16 偈)		
【浄化】	【身体】	(17,18,19 偈)		第 8 章
		(20 偈)	kṣānti	第 9 章
			vīrya	第 10 章
			dhyāna	第 11,12,13 章
			prajñā	第 14 章
	【享受】	(21ab 偈)		第 15 章
	【善性】	(21cd 偈)		
【増大】	総論	(22 偈)		第 16 章
	【身体】	(23ab 偈)		
	【享受】	(23cd 偈)		
	【善性】	(24 偈)		
		(25ab 偈)		第 17 章
		(25cd 偈)		第 18 章
		(26,27 偈)		第 19 章

本稿では、この七要処・十二項目による学処の整理法が、単に SS の構成上の特色というだけのもではなく、シャーンティデーヴァの菩薩行思想それ自体の骨格をなすものであることを確認し、また彼の後継者達にもそのようなものとして伝承されていたことを示したいと思うが、そのためには、この整理法が後代の学僧たちによって実際にどのように言及されてきたのかを検証してみることが必要であろう。以下にそのことをインド仏教末期の教学の中心地であったヴィクラマシーラ (Vikramaśīla) 寺院の代表的な学僧三人の場合について見ることにするが、その前に、まず近年の本書についての主要な研究がこの整理法をどのように見てきたかを確認しておきたい。この整理法に対する評価は研究者の間で未だ固まっておらず、今後本書の研究を進めていく上でも、ここでこの「整理法」の存在とその指示する内容については確定しておくことが望ましいと考えるからである。

3. 修道項目の数の確定

SS 研究の先駆であり、同書の校訂テキストを出版した C. Bendall は、27 の偈頌が本書の構成の軸となっていることはもちろんのこと、この七要処による整理法についても当初から着目していたようである。そのことは版本の Introduction における記述、およびその末尾に添えられた本書の Summary に対する彼の区分けの様子からも窺い知ることができる。

ところで Introduction において氏はこれを“nine-fold classification”という名で呼んでいる。この呼び方から、彼がこの要処からなる組み合わせの数を、我々のように三×四の十二通りとしてではなく、三×三の「九通り」と見ていたことが判る¹²が、これは彼が「捨施」を要処の一つに数えていないためである。先の図表において確認されるように、本書では序章・総論・「捨施」までが第一章の中に収められており、また他の修道項目とは違って「捨施」には偈頌の割り当てがない。そのことに鑑みてか、彼はこの部分を一括して論書全体の導入部分として扱い¹³、あえて「捨施」を修道項目として別立てしなかったようである。それにより「身体」、「享受」、「善性」の「捨施」という三つが修道項目に加えられずに、十二項目と数えるところが九項目とされているのである。

Bendall に続く中野[1935]、田村[1982]、Hedinger[1984]および浅野[1991]の見解は以下のようなものである。

本書の漢訳にあたる『大乘集菩薩学論』の国訳を担当した中野氏は、Bendall の Introduction に倣ってその解題に本書全体の梗概を与えている。氏が Bendall を参考にしていることは確実であるが、その解題には本書が偈頌に基づいて構成されているとする記述こそ見られるものの、梗概自体の組み立ても概ね章立ての枠組みに沿って記されており、七要処からなる整理法に対して特別の関心が向けられている様子はない。第4偈を説明する箇所においても、七要処について言及する記述は見られない。

田村・Hedinger の両氏は、共に七要処の前半三つをそれぞれ四通りに実践すると記していることから、我々と同様、修道項目については十二区分と理解していると考えてよいだろう。両氏の見解は六波羅蜜とこの整理法とが本書の両軸として並立的に機能していると理解している点でも共通している。

前述の浅野[1991]は、本書の構成がこの整理法に基づいていることを前三者に比べ最も端的に主張しているようであるが、「捨施」の対象に関しては、「その対象があいまいなままに説かれている」としており、あえて言うならば、対象を三つに分かたずに、一切の「捨施」を一項目とみなしているということができるが、実際のところそもそもこれを修道項目として別立てすることにはあまり積極的ではないようである。この点、氏は Bendall に近い見解を示しているものと言えよう。

以上のように、要処の組み合わせによる修道項目をいくつと数えるかに関しては若干の相違が見られるものの、本書の構成がこの整理法に沿ったものであると考えている点では、中野氏を除く各氏の見解は概ね一致していると見てよい。その組み合わせの数についても、違いは「捨施」の扱いを巡る一点に限られていることがわかった。

さて、それではその「捨施」は SS のなかではどのように扱われているのだろうか。先に見たように、総標と指摘されている第4偈には明確に「捨施」という言葉が出されていたことから考えても、特に大きな解釈上の論拠がない限りこれを黙殺することは許されないと思われるのであるが、そのみならず、論主がこの「捨施」を実践すべき要処の一つと考えていたことは、七要処の提示から本論へと移るに際して、以下のような導入部分を設けていたことから確認することができるであろう。

それゆえ、以上のように「身体」と「享受」と「善性」とを停滞することなく「捨施」し「守護」し「浄化」し「増大」することが、適切に修習されるべきである。その中でまず、「捨施」のために、所有することの害悪 (parigrahaḥ) という観点を通じて、離欲 (vairāgya) を生ぜしめるべきである。また、捨離 (tyāga) の称賛も修習すべきである。¹⁴

Bendall のように「捨施」を導入の一部に含めてしまう見解については、結局のところ先述したように単純に章立てとの関係のみから言われているに過ぎないと考えられる。そもそも「捨施」を修道項目から除外してしまうことは、「捨施」こそを菩薩の利他行の最重要課題と見て重視する論主の立場¹⁵からしても、もとより不適當であると言えよう。

また、「捨施」の対象をいくつと見るかについてであるが、論主はこの「捨施」の対象に関する説明ほぼ全てを *Vajradhvaṣṣūtra* からの連続的な引用によって述べてはいるものの、引用の間に「享受」と「善性」の「捨施」もまた同経に説かれている。(Bendall[1902]P. 26 4-5) と自らの整理法を意識した記述を挟むなどしていることから考えても、あくまで論主は整理法の組み合わせ方を崩すことなく、「捨施」の対象についても「身体」と「享受」と「善性」という三つの要処を考えていたと認めることが適當であるということになる。

また、Bendall は先述の Introduction 中に、SS に言及する後代の著作の一つとして、本書の簡約書とみなすことのできるヴァイローチャナラクシタ (Vairocanarakṣita, 11c) の *Śikṣākusumamañjalī* (KM) を取り上げているが、その説明の中で、同書が SS と同様の “nine-fold classification” により構成されているとの記述を与え、欄外に同書と SS との章題の対応関係を注記している¹⁶。しかしながら、KM 自体には以下のように

聖者シャーントンティデーヴァによって、説明されるべき事柄 (bśhad bya) 一切を特徴付ける、註釈を伴う『学処集』 (bślap btus/ SS) の一偈 (tshigs bcad/ *kārīkā) が説かれている。す

なわち、『「身体」と「享受」と三世にはたらく「善性」とを一切衆生の為に「捨施」すること、それらを「守護」し「浄化」し「増大」することである』(第4偈)と。「身体」とは・・・(中略)・・・捨施などの四種をそれらのそれぞれに対して (so so nas/ *prthag) 示しているであって、・・・¹⁷

とあって、むしろ明確に三×四の組み合わせを支持していると見ることができる。

以上検討してきたように、この問題については論主シャーンティデーヴァも往時の彼の追隨者達も三×四という組み合わせこそを意図していたことが確認される。ゆえに、この整理法については七要処・十二項目と見ることが妥当であると結論されるだろう。

II. 後代への影響

さて次に、後世の学僧たちがどのようにこの整理法に言及していたかということ、インドにおける仏教の最後の中心地であったヴィクラマシーラにゆかりのある論師たちの実例を引いて見ていくことにしよう。

先に述べたように、一般にヴィクラマシーラの学僧たちは、行軌の清浄なることを重視し、実践に努めていたようである。そして、この面において特にシャーンティデーヴァから絶大な影響を受けていたと言われている¹⁸。彼の著作のうち、後代の学僧たちから言及され表舞台に登場するのは圧倒的に BCA の方であって、自ずと現代の研究者の目もそちらに向けられてきたのであるが、直接的に言及されることこそそう多くはないものの、先にプトンの評価を見たように、往時の学僧たちにとって SS は単なる教証の出典にすぎないものではなく、諸經典に錯綜して現われる多様な教説を整理する体系を示すものという点で重要な論書であると見なされていたのであり、その整理法は、以下にみるように彼らが BCA を解釈する上でも重要な役割を果たしていたと考えられるのである。

1. プラジュニャーカラマティ

シャーンティデーヴァの後継者として最も重要なのは起源 1000 年頃ヴィクラマシーラでジュニャーナシュリーミトラやラトナキールティ、ラトナーカラシャーンティらとともに活躍したと言われるプラジュニャーカラマティ (Prajñākaramati, C.950-1000) である。彼が著した BCA の広註 *Bodhicaryāvatārapañjikā* (BCAP) は当時から今日に至るまで、数多く著された類書のなかでも常に筆頭に挙げられており、シャーンティデーヴァの思想が継承されていく過程で、彼の解釈が後代に大きな影響力を持ったであろうことは容易に想像される。

彼の註釈は大部で經典・論書の引用が豊富であり、単なる語釈整理に止まらず比較的自由に独自の傍論を展開する点が特徴的であると、江島[1966]によって報告されている。残念なことに、この研究は BCAP の第九章の註釈部分のみについてのものであるため、SS との関係については、第九章に引用される經典の三割強が SS からの再録であることが指摘されるに止まっている。しかしながら BCAP と SS の関係は、むしろ江島氏が研究対象としなかった同書の第八章までの部分に特徴的に現われているということができる。というのも、プラジュニャーカラマティは第八章までの部分において、BCA 本偈の解釈に盛んに SS の偈頌を援用して註釈を

与えており、しかもその説明は、本稿に見てきた SS の学処の整理法についても十分意識的であることが窺われるからである。

同書には SS の偈頌 27 偈頌のうち 15 偈が引用されている。すなわち、**第 1・2 偈** (BCAP 第 3 章 p. 42), **第 3・4 偈** (第 4 章 p. 48), **第 5 偈** (第 5 章 p. 50), **第 6 偈** (第 5 章 p. 50, p. 77), **第 7・8 偈** (第 5 章 p. 63), **第 9 偈** (第 8 章 p. 137, 第 9 章 p. 169), **第 10 偈** (第 5 章 p. 68), **第 11 偈** (第 5 章 p. 69), **第 12 偈** (第 5 章 p. 74), **第 13 偈** (第 5 章 p. 70), **第 19 偈** (第 5 章 p. 80), **第 20 偈** (第 6 章 p. 81, 第 8 章 p. 136) であるが、ここに見られるように、偈頌の引用は BCA の第 3 章から第 9 章の冒頭部分 (Vaidya pp.42-169) に対応する箇所まで、中でも第 5 章に集中しており、引用される順番も SS 中での順序にほぼ沿ったものとなっている¹⁹。また、偈頌が最後に引用されるのは BCA 9.1 の註釈部分であるが、この偈には「これら全ての準備的実践 (parikara) を、智慧のために尊者が説かれたのである」とあり²⁰、それに続く註釈には準備的実践とは布施等の波羅蜜であると説明されている。これらから、プラジュニャーカラマティが、五波羅蜜の実践を SS の偈頌に対応させて理解していたということが分かるだろう。

彼はまた、偈頌の総評に示された七要処による十二項目の整理法についても十分意識的であったと見なしうる。そのことが最も端的に現われるのが、BCA 4.48²¹に対する註釈部分である。この偈文の中には「(如来によって) 説かれた通りの学処を實踐するために」 (yathoktaśikṣāpratipattihetoh) という言葉があるが、これを注釈するためにプラジュニャーカラマティは、先に本稿のはじめにも引用した、SS において第 3 偈、第 4 偈を導入する部分を、前後の文脈をくずすことなく、経典の引用もそのままに SS から抜き出して説明に充てているのである。このことから、学処の實踐ということに関しては、彼がほぼ全面的に SS の方法を受け入れていたということが理解される。

また、第 5 章「正知 (samprajanya) の守護」の導入部分には、

evam ātmabhāvādīnām utsargaṃ rakṣāṃ ca pratipādyā punar vistareṇa rakṣāśodhanavardhanāni pratipādayitum upakramate/… (Vaidya[1960] p.50.2-3)

以上のように、「身体」などの「捨施」と「守護」とを説明してから、更に詳しく「守護」・「浄化」・「増大」を説明することを始める。・・・

同様に、第 6 章「忍辱波羅蜜」の導入部分には、

tad evaṃ bahudhā śīlavīsuddhiṃ pratipādyā ātmabhāvādīnām rakṣāṃ śuddhiṃ pratipādyā śubhāvīsuddhiṃ pratipādayitum, … (Vaidya[1960] p.81.2-3)

それゆえ、以上のように種々に戒の「浄化」を説明し、「身体」などの「守護」・「浄化」を説明してから、「善性」の「浄化」を説明すべく、・・・

とあり、これらからもこの整理法によって組織的に BCA を解釈していこうとするプラジュニャーカラマティの意図を明確に見て取ることが出来るであろう。

BCA の章立ては一見、六波羅蜜の順序に沿っているようでありながら、布施波羅蜜、持戒波羅蜜を説く章を欠いており、それにあたる部分が「菩提心の称賛」(第 1 章) から「正知の守護」(第 5 章) という菩提心につわる事柄の説明に置き換えられている。この論の構成上の謎に関しては、Crosby & Skilton[1996] によって、そのうちの第 2 章、第 3 章が anuttarapūjā という

発心儀礼と深く関係していることが既に指摘されているのであるが²²、ここに見てきたように BCA の前半部分が SS の整理法によって読み解きうるとすれば、それとは別の視点から BCA の構成を解明することも可能であるかも知れない。プラジュニャーカラマティの解釈が後世に対して持ったであろう強い影響力を考慮すると、この SS の整理法と BCA の構成との対応関係については、今後さらに綿密な比較・検討がなされるべきであるように思われる。

2. ヴァイローチャナラクシタ

プラジュニャーカラマティらが活躍した時代からおよそ 50 年から 100 年ほど下ったヴィクラマシーラに、ヴァイローチャナラクシタという学僧がいた。この人物については、後述するディーパンカラシュリージュニャーナ (Dīpaṅkaraśrījñāna, 980-1052) の同輩であったとも弟子であったとも言われるが、詳細は不明である。彼の著作と伝えられる *Śikṣākusumamañjalī* (KM) は SS の現存するほぼ唯一の註釈書である²³。彼はこれとは別に BCA にも註釈を書いていることから、シャーンティデーヴァと何らかの学術的な繋がりがあったと考えられている²⁴。

この著作については、先に修道項目の数を議論した際に既に紹介しているが、同書には冒頭に以下のような SS への賛辞が見られる。

もし身体と享受と善性との三つを、捨施し、守護し、浄化し増大するという諸々の利を精進することによって確かなものになりたいと望むならば、無上なる『学処集』に依拠すべきである。宝の如き様々な經典の(集められた)一つの大海であるこの『学処集』を見るならば、食欲を完全に断ち切る。²⁵

この言葉の数行後に先程引用した部分が続くのだが、先般の箇所においては第 4 偈の引用として現われていた七つの要処が、ここでは論主ヴァイローチャナラクシタ自身の言葉で、菩薩の実践の内容として語りなおされていることがわかるだろう(下線部)。このことから、この論主もまた偈頌の第 4 偈を SS 全体の総標と見ており、そこから導出される七要処・十二項目の整理法が SS の構成を、ひいては如来の指示する学処の体系を学ぶ上で決定的なものであると考えていたことは確実である。

なお、先述したように、この論師にはシャーンティデーヴァとの学術的関連があると考えられることから、この整理法は、当時のシャーンティデーヴァの追従者達にとって一種定説めいた存在感を持つ学説となっていたとも推測される。KM は SS が彼ら追従者達にどのように受容されていたかを知る上でも重要な著作である。KM に関しては稿を改めて詳しく検証してみたい。

3. ディーパンカラシュリージュニャーナ (アティシャ)

チベットへの仏教再伝の中心的人物として名高い学僧ディーパンカラシュリージュニャーナ (アティシャ, Atiśa) は、入蔵以前、ヴィクラマシーラの学頭として活躍していたことが知られているが、それ以前には金州 (suvāṇḍvīpa) のダルマパーラ (Dharmapāla-/kīrti of suvāṇḍvīpa, C.1000)²⁶に師事して、12 年間に渡り『現観莊嚴論』と併せて、BCA と SS とを学んだといわれている。このダルマパーラには BCA について二作、SS についても一作

Śikṣāsamuccayābhisamaya という難解で謎めいた著作があることから、ひとまずシャーティデーヴァの教学に通じていた人物であったことは間違いないと思われる。彼から学び得たことで、アティシャもまた、シャーティデーヴァの著作に精通していたであろうことは想像に難くない。

アティシャは入蔵してのち、彼を招来したチャンチュブ・ウー (Byang chub 'od) の求めに応じて『菩提道燈論』およびその広註 *pañjikā* (BMDP)²⁷ を書いている。この広註には数多くの経論が引用されているが、なかでも BCA と SS からの引用は群を抜いて多い。また、引かれる経典の中には SS からの再録と思われるものも多く、彼の教説におけるシャーティデーヴァの影響の大きさを窺い知ることができる。²⁸

広註においてアティシャは菩薩の制戒を主に『菩薩地戒品』と SS とによって説明している²⁹。第五章・菩薩律儀品において、彼は SS に三丈夫それぞれの菩薩戒が説明されているとして、先般の SS の偈頌の第 3 偈、第 4 偈に相当する部分をそれぞれ大士・中士の制戒として引用する。すなわち、

軌範師シャーティデーヴァにより、経典は残らず三丈夫によって学ばれると説かれている。すなわち、大乘における大位の修行 (*goms pa che ba*) と、中位の修行と、小位の修行である。大位の修行に関しては、『学処集 (SS)』に「菩薩の学処は、大乘に詳細に説かれている」(第 3 偈前半)とあり、また『入[菩薩]行論 (BCA)』に「勝者の子達によって学ばれないものはなに一つとしてあることはない」(5.100ab)と説かれている。また、吉祥なるボーディパドラ上人はまた・・・(中略)・・・その[大乘]における中位の修行についてもまた、『学処集 (SS)』に「それゆえ毀犯 (*ltung ba/āpatti*) のないように諸々の要処が知られるべきである (第 3 偈後半)。「身体」と「享受」と三世にはたらく「善性」とを一切衆生の為に「捨施」すること、それらを「守護」し「浄化」し「増大」することである (第 4 偈)。」と説かれている。小位の修行についても・・・(以下略)³⁰

アティシャもまたこの SS の整理法に着目しているということはこの引用からも明らかである。しかしながら、第 4 偈を菩薩の学処を集約する総評と見ている点では一応プラジュニャーカラマティらの見解と重なるものの、それが中位の菩薩に対する教令と限定されている点で、諸師に比べ若干評価が低められていると見ることもできるだろう³¹。

結語

以上、考察の要点をまとめるならば以下のようなだろう。

- ・SS は単なる経典の塊集としてではなく、むしろ多様で錯綜する経典の所説の要点を体系的に提示する論書として重視されていた。
- ・その体系は 27 の偈頌によって骨組みを与えられており、その偈頌自体も、総標とされる第 4 偈から導き出される「七要処・十二項目の学処の整理法」とでも呼ぶべき体系をもとに配置されたものであることが明らかになった。
- ・ヴィクラマシーラの学僧たちは、この整理法に依拠してシャーティデーヴァの思想を理解・解釈していた。

ヴィクramaシーラの学僧たちがシャーンティデーヴァの思想をどのように理解し、後世に伝えていったかという点については、チベットにおいて今日でもこの論師に対する評価が高いことに照らしても、今後さらに考察を深めるべきテーマであると考えられる。

<略号および使用テキスト>

SS	Śikṣāsamuccaya, ed. by C.Bendall, St.-Petersburg, 1897-1902., P.No.3940, D.No.5336
BCA	Bodhicaryāvatāra, ed. by I.P.Minayev, Zapisiki, 1890., P.No.5272, D.No.3871
BCAP	Bodhicaryāvatāra of ŚĀNTIDEVA with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati (Buddhist Sanskrit Texts 12), ed. by P.L.Vaidya, Darbhanga, 1960., P.No. 5273, D.No. 3872
KM	Śikṣākusumamañjarī, P.No.3943, D.No.5339
BMDP	Bodhimārgadīpapañjikā, P.No.5345, D.No.3948
P	北京版チベット大蔵経
D	デルゲ版チベット大蔵経

(注記)

- ¹ SS (p.16 1-2)には「修練のためにこれ (=菩薩の正しい行) に通暁することを望む者は、まず、行の初歩を学ぶためにこの Śikṣāsamuccaya に傾注すべきである」(yaḥ punar etad abhyāsārtham vyutpāditaṃ icchatī tenātra śikṣāsamuccaye tāvac caryāmukhamātraśikṣānārtham abhiyogaḥ karaṇīyaḥ...)という一文がある。
- ² 主要なものは後述する Bendall[1902], 中野[1935], 田村[1982], Hedinger[1984]および浅野[1991]である。
- ³ このような論の進め方は BCA とも共通する。BCA 3.23 及び 4.1 を参照のこと。
- ⁴ uktāni ca sūtrānteṣu bodhisatvaśikṣāpadāni/ yathoktam āryaratnameghe/ katham ca kulaputra bodhisatvā bodhisatvaśikṣāsamvṛtā bhavanti/ iha bodhisatvah[*sic.*] evaṃ vicārayati/ na prātimokṣasamvaramātreṇa mayā śakyam anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambodhum/ kiṃ tarhi yānīmāni tathāgatena teṣu teṣu sūtrānteṣu bodhisatvasamudācārā bodhisatvaśikṣāpadāni prajñaptāni teṣu teṣu mayā śikṣitavyam iti vistaraḥ/ (Bendall[1902] p.17.5-9)
- ⁵ tasmād asmadvidhena mandabuddhinā durvijñeyo vistaroktatvād bodhisatvasya saṃvaraḥ tataḥ kiṃ yuktam// marmasthānāny ato vidyād yenānāpattiko bhavet//
Bendall[1902]などではこの部分が偈頌の第3偈として抽出されている
[vistarokto mahāyāne] bodhisatvasya saṃvaraḥ/
marmasthānāny ato vidyād yenānāpattiko bhavet//3//
菩薩の制戒は大乗に詳細に説かれている。
それゆえ、毀犯のないよう、諸々の要所を知るべきである。
なお第19偈ではこのような仏の訓戒に従わなければ apāyaga となるとされている。
- ⁶ katamāni ca tāni marmasthānāni yāni hi sūtrānteṣu mahāyānābhīratānām arthāyoktāni// yad uta ātmabhāvasya bhogānāṃ tryadhvavṛtteḥ śubhasya ca/ utsargaḥ sarvasatvebhyas tadrakṣāsuddhivardhanam// 4//

eṣa bodhisatvasya samvarasamgrahaḥ/ (Bendall[1902]p.17.11-15)

⁷ チベット訳語は gnad kyi gnas. 浅野氏は「要所」という字をあてている。

BCA 3.10 にはこのうち「身体」・「享受(物)」・「徳性」の「捨施」が説かれており、同所に対するプラジュニャーカラマティの注釈において、三つの要所それぞれに語釈が与えられている。

ātmabhāvān iti sarvagaticyutyupapattiṣu sarvakāyān/ nirapekṣaḥ sarvaprakāreṇa nirāsaṅga ity arthaḥ/ tyajāmi utsrjami/ dadāmi arthaḥ/ bhogān iti upabhogyavastūni hayagajarathaprāsādāyāśrayasrakandanavastrābharaṇakanyādini/ sarvatryadhvagataṃ śubham iti sarvatraidhātukasamgrhitam puṇyāneñjyasvabhāvam/ yadi vā dānaśilādiprasūtam bhāvanāmayaṃ ca/ (Vaidya[1960] p.39.18-21)

「諸々の身体を」というのは、死にかわり生まれかわりする一切趣における、全ての肉体を、である。顧慮することなく、とはあらゆる点で執着のない、という意味である。放棄することが「捨施」するということであり、与える、という意味である。「諸々の享受(物)を」というのは、享受されるべき事物であって、馬・象・戦車・宮殿などの住居・花輪・履物・衣服・装飾物・美女などである。「三世全てにある善性を」とは、三世全てにおいて得た不動(āneñjya)を性質とする徳性である。あるいはまた、布施や戒から生じたもの、また修所成のものである。・・・

ātmabhāva については上の語釈に従って「身体(=kāya)」という訳語を当てたが、MroziK[1998]はこの語に embodied subject という訳を与える。

⁸ 「修道項目」というのは筆者による造語であり、対応する原語はない。また、筆者は以前、修道項目の数については10と数える見解を持っていたが、本論に後述する理由から見解を改めた。なお、七要処の最後の三つは、部派仏教以来の伝統的な修道項目である「四正勤」との関係が深い。これについては拙稿(『印仏研』50-2)を参照のこと。

⁹ 従来、彼の著作と考えられていた『経集』(Sūtrasamuccaya)は今日では彼のものとは考えられなくなってきた。 (一島[1968]参照)

¹⁰ Obermiller[1931] p.43, および同書 p.58 を参照のこと。

¹¹ 羽田野[1986]参照。なお、Rang gi rtogs pa brjod pa (正式には Rang gi rtogs pa brjod pa mdo tsaṃ du bshad pa (P.No.6060)の該当箇所(Ga 55a.6-7)には以下のようにある。

lhag par zab cing rgya che'i gsung rab tshogs bsgrigs pa'i go rim nyid las lam gyi gnad kun la nges ster bslab ba kun btus la brten nas ...

非常に深淵で広大な諸々のお言葉を並べる配置そのもの(go rim nyid)によって全ての(修行)道の枢要(gnad)に決定を与えるものである『学処集』(SS)に依拠して・・・引用中にある「枢要」(gnad)という語には、本稿で「要所」と訳している marmasthāna のチベット訳語 gnad kyi gnas との関連もうかがわれる。この文献に関しては Thurman(ed.)[1982] (pp.40-47)に全体の英訳が収められている。

¹² Bendall[1902]p. II には以下のようにある。

It will be seen from the outline-summary of the whole work, which is also subjoined to the present Introduction that the general argument or groundwork of the treatise is very simple, consisting of introductory matter on the essential duty (faith and self-renunciation) of a Bodhisat, followed by three aspects of his life each regarded from three points of view.

¹³ Bendall[1902]の summary の中 (p.xxxi) で、この部分は一括して introductory portion に収められている。

¹⁴ tasmād evam ātmabhāvabhogapūṇyānām aviratam utsargarakṣāsuddhivṛddhaya yathāyogaṃ bhāvanīyāḥ/ tatra tāvad utsargārtham parigrahaḥ sabhāvanādvāreṇa vairāgyam utpādayet, tyāgānuśamsāms ca bhāvayet/...(Bendall[1902] p.18 8-10)

- ¹⁵ たとえば、この章は「布施は菩薩の菩提である」とする『宝雲經』の引用により締めくくられている (Bendall[1902]p.34.5)。また BCA 3.10 も参照のこと。この箇所には三要処の捨施が説かれているが、BCA のなかで三要処がまとめて現われるのはこの偈だけである。なお、ツォンカパの *Lam rim chen mo* (P.No.6001: Ka 166a3)、および *Lam rim bsdus don* (*Byang chub lam gyi rim pa'i nyams len ram gzhag mdr bsdus te brjed byang du byas pa*, P.No.6061: Ga 58a2) の第 24 偈にも同様に三要処の捨施を説く記述がある。
- ¹⁶ Bendall[1902] p.xi
- ¹⁷ この著作は全編偈の形で書かれている。下線部は SS の第 4 偈の引用部分である。
 'phags pa zhi ba'i lha gang gis// bshad bya thams cad mtshon byed pa'i// gang zhig bslab btus grel pa ni// yod pa'i tshigs bcad gcig gsungs pa// 'di lta ste/ bdag gi lus dang longspyod dang// dge ba dus gsum bsags pa mams// sems can kun la btang ba dang// de bsrung dag pa spel ba'o// lus ni 'di la rab grags pa'i// 'di ltar phung po lnga po'o// longspyod nyer mkho thams cad de// de'i gnas pa yi rgyur gyur pa'o// dge ba legs pa thams cad de// 'das dang ma 'ongs da ltar ba'o// gtong ba la sogs mnam pa bzhi// de dag so so nas bstan te//... (P.Ki.227b4-6 ; D.Khi.196b3-5)
- ¹⁸ Ruegg[1981] p.118
- ¹⁹ BCAP は第 3 章 23 偈から第 4 章 45 偈まで、及び第 10 章の註釈を欠いている。また SS の偈頌のうち BCAP に引用されていないものは、主として第 21 偈以降の「増大 vardhana」に関するものである。
- ²⁰ Skt.; *imaṃ parikaraṃ sarvaṃ prajñārtham munir jagau* (BCA, p.208)
 Tib.; *yan lag 'di dag thams cad ni/ thub pa'i zhes rab don du gsungs//* (P.La.35a3)
 この部分は旧本では「これら全ての準備的実践は自己と他者の智慧を目的とする」(bsdog pa 'di dag thams chad kyang// bdag dang gzhan gyi shes rab don// ;Saito[2000]p.49) とあり、上記の現行本とはテキストが若干異なるが、解釈上大きな違いをもたらすものではない。
- ²¹ BCA 4. 48
*evaṃ viniścītya karomi yatnaṃ yathoktaśiḥṣāpratītihetoh/
 vaidyopadeśac calataḥ kuto 'sti *bhaimajyasādhyasya nirāmayatvam//48//
 Read: bhaiśajya- (BCA, p.169.15-16)
 以上のように決意して、私は[経典に]説かれた通りの学処を実践するために努力する。医者
 の言いつけを外れて、どうして薬によって治療されるべき者が健康になることがあろう
 か。
- ²² K.Crosby & A.Skilton[1995] p.xxxiv, p.9
- ²³ チベット大蔵経には後述するように SS に関係する著作として金州のダルマパーラによる *Śiḥśāsamuccayābhisamaya* (P.No.3942,4550, D.No.5338,5464)が収録されているが、これは要義書とでも呼ぶべきものであり、註釈書の体裁をとっていない。
- ²⁴ 『入菩薩行細疏』(P.No.5277, D.No.3875)。前出の江島[1966]を参照のこと。
- ²⁵ *gal te lus dang longspyod dang ni dge ba gsum// btang dang bsrung ba dang ni dag dang spel ba mams// gzhan don brtson pas nges par byed par 'dod 'gyur na// bla med bslab pa kun las btus pa la brten bya// mdo sde rin chen sna tsogs kyi// rgya mtso chen po gcig po(D:pu) yi// brlab(D:bslab) kun bsdus pa 'di mthong na// sred pa kun nas gcod par byed//...(KM, P.Ki.227b1-2; D.Khi.196a7-b2)*
- ²⁶ チベットで *gser gling pa* と通称される。有形象識説 (Sākāra-Vijñānavāda) の立場の人といわれ、Ruegg[1981]によればジュニャーナシュリーミトラ、ラトナーキールティはアティシヤとともに彼の高弟であったとされる。
- ²⁷ 北京版、デルゲ版とも表題を *Bodhimārgadīpapañjikā* とする。この著作については彼に生涯つき従ったナクツォ翻訳官の作であるとする伝承もある。
- ²⁸ 釈如石[1997] pp.51-52
- ²⁹ チベットでは後に菩薩の授戒儀礼に唯識流、中観流の別を設け、それぞれがこの『菩薩地戒品』と SS とに基づくものとされるようになる (藤田[1988]参照) が、その端緒はアティシヤのこの章の記述に見出すことが出来るだろう。
- ³⁰ *slob dpon zhi ba'i lhas ni mdo sde ma lus pa gang zag gsum gyis(D:gyi) bslab par(D:pa) mdzad de/ 'di ltar theg pa chen po la goms pa che ba dang/ goms pa 'bring dang/ goms pa chung ba'o// goms pa che*

ba'i dbang du mdzad nas bslab pa kun las btus pa nas/ byang chub sems dpa'i sdom pa ni/ rgyas par theg pa che las 'byung/ zhes 'byung ba dang/ spyod 'jug las kyang/ rgyal sras mams kyis mi bslab pa/ 'ga' yang yod pa ma yin no/ zhes gsungs so// bla ma dpal byang chub bzang po'i zhal nas kyang/... ..// de la goms pa 'bring po'i dbang du mdzad nas yang bslab pa kun las btus pa nas gang gis ltung bar mi 'gyur pa(D:ba)'i// gnad kyi gnas mams 'dis rig bya// bdag gi lus dang longs spyod dang// dus gsum skyes pa'i dge ba mams// sems can kun la btang ba dang// de bsrung dag pa spel pa(D:ba)'o/ zhes gsungs so// goms pa chung ba'i dbang du mdzad nas(D:na) yang de nyid las... .. (BMDP, P.Ki.306b1-7; D.Khi.265b4-266a2)

なお、ここに BCA よりとして引用されている部分は、BCA 5.100 (BCA, p.177) に見出すことが出来る。(引用されているのは以下の下線部)

yā avasthāh prapadyeta svayam paravaśo 'pi vā/
tāsv avasthāsu yāh śikṣāh śikṣet tā eva yatnatah// 99//
na hi tad vidyate kiñcid yan na śikṣyam jinātmajah/
na tad asti na puṇyam evaṃ viharatah satah// 100//

³¹ この部分とは直接関係はないが、アティシヤのこの大乘の修行に大・中・小の三種を分かち考え方は、以下のような記述に見られるシャーンティデーヴァの見解とも呼応するものである。

adhimātrādhimukticyādharmatāvacañāc ca gamyate/ yathā madhyamṛduprakāṛāpy
adhimukticyā 'sty eveti// (SS, p.7.19-20)

「優れた信解行の法性」という言葉から、中・弱という種類の信解行もまた存在するということが理解されるのである。

(参考文献)

- Bendall, C. [1902] *Śikṣāsamuccaya*, Bibliotheca Buddhica 1, St.-Petersburg.
- Bendall, C.&
Rouse, W.H.D.[1981] *Śikṣāsamuccaya*, a compendium of Buddhist doctrine, London, (repr. Delhi: Motilal Banarsidass, 1981)
- Crosby & Skilton[1996] *The Bodhicaryāvatāra*, Oxford, Newyork: Oxford University Press.
- Hedinger, J. [1984] *Aspekte der Schulung in der Laufbahn eines Bodhisattva*, Dargestellt nach dem *Śikṣāsamuccaya* des Śāntideva, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Mrozik, S. [1998] *The Relationship Between Morality and the Body in Monastic Training According to the Śikṣāsamuccaya*, Harvard University Cambridge, Massachusetts (Doctoral dissertation printed by UMI Dissertation Services),
- Obermiller, E. [1931] *History of Buddhism (Chos 'byung)* by Bu-ston (part 1: The Jewelry of Scripture), Heidelberg
- Ruegg, D.S. [1981] *The Literature of The Madhyamaka School of Philosophy in India (A History of Indian literature 7)*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- Saito, A. [2000] *A Study of the Dūn-huang Recension of the bodhisattvacaryAvatAra*, A Report of Grant-in-Aid for Scientific Research(C)
- Thurman, R.A.F.[1982] *The Life and Teachings of Tsong-khapa*, Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives.

- 浅野守信 [1991] *Śikṣāsamuccaya* における修道論の体系—ātma bhāva を中心に一, 『前田専学博士還暦記念論集・<我>の思想』, 春秋社, pp.225-234.
- 一島正男 [1968] *Sūtra-samuccaya* の作者について, 『印度學仏教學研究』16-2, pp.844-846
- 江島惠教 [1966] 「入菩提行論」の註釈文献について, 『印度學仏教學研究』14-2, pp.190-194
- 积如石 [1997] 『《菩提道燈》 抉微』(中華佛學研究所論叢 [12]), 法鼓文化
- 田村智淳 [1982] 中觀の實踐—寂天の『学処要集』, 『講座大乘仏教第7巻・中觀思想』, 春秋社, pp.251-282.
- 中野義照 [1935] 『大乘集菩薩学論』(『国訳一切經』 瑜伽部 11), 大東出版社, pp.1-244
- 羽田野伯猷 [1986] チベットにおける仏教觀の形成について, 『チベット・インド学集成』(第一巻 チベット篇 I), 法藏館, pp.277-303.
- 藤田光寛 [1988] チベットにおける菩薩戒の受容の一断面, 『印度學仏教學研究』36-2 pp.(108)-(115)

2002.7.20 稿

ささき かずのり 東京大学大学院博士課程

Remarks on the System of Bodhisattvas' Discipline (*Śikṣā*) in the *Śikṣāsamuccaya*
and Its Influence on the Buddhist Monks at Vikramaśīla Monastery

SASAKI Kazunori

The *Śikṣāsamuccaya*, one of the authentic works of Śāntideva, is thought to have had a great influence on the monks living in Vikramaśīla monastery, the centre of later Indian Buddhism. This work is composed of over 100 quotations from Mahāyāna scriptures, most of which are introduced by the author's own short comments. These quotations are systematically arranged by the author with the insertion of 27 explanatory verses (*kārikā*). In verse 4 Śāntideva gives an important key to understanding the framework of this work, which presents the following 7 crucial points (*marmasthāna*) of the Bodhisattva's practice, that is, (1) body (*ātmabhāva*), (2) possessions (*bhoga*), (3) goodness (*śubha*), (4) renunciation (*utsarga*), (5) preservation (*rakṣā*), (6) purification (*śuddhi*), and (7) enhancement (*vardhana*). Combining each of the former 3 points with the latter 4, the author gives 12 topics, which explain the outline of the whole work.

The present paper has two aims. The first is to determine the number of "topics" as 12, mainly on the basis of internal evidence in the *Śikṣāsamuccaya*. Modern scholars differ in their understanding of the arrangement of this work, especially in regard to the number of topics, although they equally emphasize its importance for analyzing the structure of the *Śikṣāsamuccaya*.

The second aim is to discuss the influence of this system on three eminent monks of Vikramaśīla monastery, i.e., Prajñākaramati, Vairocanarakṣita and Dīpaṃkaraśrījñāna (Atiśa).

In his *Bodhicaryāvatārapañjikā* Prajñākaramati, one of the best-known successors of Śāntideva, explains 5 *pāramitās* exactly in the light of the above system.

Vairocanarakṣita, the author of the *Śikṣāsakusumamañjalī*, gives a tribute to both Śāntideva and the *Śikṣāsamuccaya* at the start of his work and mentions verse 4 of the *Śikṣāsamuccaya* as a crucial key to understanding the entire work.

Dīpaṃkaraśrījñāna, renowned as a leading figure in the second transmission of Buddhism to Tibet, cites in his *Bodhicaryāvatārapañjikā* far more passages from Śāntideva's works than from works by any other writers. In the section where he explains the restraint (*samvara*) of Bodhisattvas, Dīpaṃkara quotes the above-mentioned verses 3 and 4 from the *Śikṣāsamuccaya*, saying that Śāntideva presents the restraint of three kinds of Bodhisattvas.

From the above discussion, we may possibly draw the conclusion that Buddhist monks at Vikramaśīla monastery from the late 10th to early 12th centuries recognized the system of Bodhisattvas' discipline in the *Śikṣāsamuccaya* as an authoritative criterion for understanding the teachings of Mahāyāna scriptures.